

Title	口縁部が内湾する小鉢に関する一考察： 考古資料とミシュナの記述から
Sub Title	The function of the incurved rim small balls as washing hands balls : discussion from the Mishnah and archaeological finds from Palestine
Author	牧野, 久実(Makino, Kumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2016
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.86, No.3 (2016. 10) ,p.101(297)- 117(313)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20161000-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

口縁部が内湾する小鉢に関する一考察

— 考古資料とミシユナの記述から —

牧野久実

1. 口縁部が内湾する小鉢と問題の所在

口縁部が内湾する小鉢はヘレニズム時代よりローマ時代のパレスティナで一般的に出土する容器である(図1)。高さ約四く六センチメートル、つまりほぼ一テファ(小指の付け根から人差し指の付け根までの掌の幅)、口径約一二く一八センチメートル、底部の直径は口径のおよそ三分の一で掌に収まるような小型の鉢である。口縁の半周分はほぼ一ゼレット(親指から人差し指の長さ)で、恐らくは轆轤を用いる際に作り手の掌に合わせて作成したものであろう。

ヘレニズム世界に広く分布していることからともと東地中海世界のどこかで生産されたと考えられているが、

口縁部が内湾する小鉢に関する一考察

少なくとも前三世紀より前二世紀末にはキプロス東部で生産されたことが胎土分析によって確認されている⁽¹⁾。パレスティナでは前四世紀半ば以後に出現し始め、質や形状の変化を伴いながらローマ時代頃まで出現し続ける。ヘレニズム時代には胴部の断面がV字状を描くタイプと曲線を描くタイプがあり前期と後期で形状が異なるという見方もあるが⁽²⁾、定説には至っていない。底部は通常リング状である。胎土は鈍いオレンジ色から明るく黄色みがかったオレンジ色で、表面には灰色がかった黄土色から暗い赤茶色のスリップがかかる。色合いが均一でなくむらがあるものが多数見られるためスパッターペインテッドと呼ばれることもある⁽³⁾。また、焼成する際に窯の中で大量の土器が密着した結果、スリップがむらに付着した

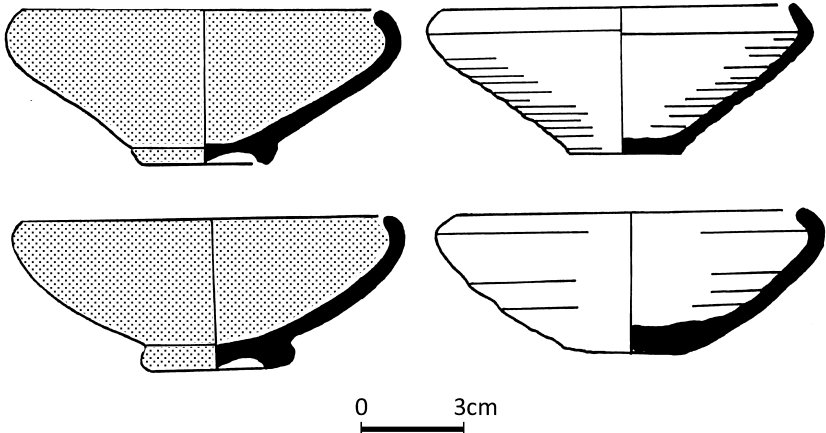


図1 口縁部が内湾する小鉢
(左は主にヘレニズム時代、右は主にローマ時代)

という考え方もある⁽⁴⁾。轆轤で成形し焼成は固い。一方、ローマ時代のもは直径一〇センチメートルほどと小型で口縁部は内湾する点はヘレニズム時代のものと同通しているが、在地産でスリップを施さず焼成が甘い点、糸切の平底を有する点が異なる。

これらは一般的に食器と考えられている。ところが実際に食材の付着物などが確認された事例は無く、また内湾する口縁部は口を直接つけて用いる場合もまた道具を使って中の食材を取る場合も使いにくい。こうした中、下エジプト、テル・アトリブ遺跡における前三〜前二世紀の浴槽状遺構から見つかった土偶は、この小鉢が食器以外に用いられたことを示す興味深い資料である⁽⁵⁾。その様子は妊婦が卵形の浴槽に座り小鉢で身体に水をかけているように見える。これと良く似た形状で漆喰を塗った浴槽状遺構は周辺から複数出土している。また、この近くの窯からは未焼成の小鉢がまとまって出土しており、写真からは少なくとも五〇点以上が重なっている様子を確認することができる⁽⁶⁾。いずれも口湾部が内湾し、リング状の底部を有する。テル・アトリブの土偶はこれまで考えられていた小鉢の食器としての用途に見直しを迫るものといえる。



写真1 テル・アトリブ出土の土偶
(Mysliwiec 1998 p. 132, Fig. 9, photo by W. Jerke)

*By courtesy of Professor Karol Mysliwiec.

そこで本稿では、小鉢が浄めの水を汲むための手水器であった可能性について、テル・アトリブの土偶資料よりもやや時代は下るが、ローマ時代のユダヤ民族の日常生活を今に伝える口伝律法ミシュナの記述を参考にしながら検証を試みる。ミシュナは古代パレスティナにおけるユダヤ社会がローマとの二度の戦争によって壊滅的な打撃を受けた後に編纂され始め、紀元二〇〇年頃に成立した。数百年にわたってギリシア・ローマ化の影響を受け変容したユダヤ民族の生活を律し、民族のアイデンティティーを再確認するためでもあった。ミシュナは種子の巻（農作物に関する法）、季節の巻（安息日と祭りに関する法）、婦人の巻（結婚と離婚、隣人に関する法）、損害の巻（市民の商売と刑罰）、聖物の巻（神殿の祭祀に関する法）、清潔の巻（祭儀的な潔・不潔などに関する法）と全六巻から構成されている。和訳としては石川耕一郎氏、長窪専三と石川耕一郎氏、三好迪氏によるものがあるが、この中で用いられる用語と考古資料の関係を検討するには、原文からの読解が必要である。このため本稿では一〇世紀もしくは一世紀と、現存する最古の写本であるカウフマン・コテックスA.50を中心にするアルベック版と

マイモニデス版⁽¹⁰⁾も必要に応じて参照した。引用した原文表記については表1にまとめて示した。なお、本稿におけるヘブライ語のカナ表記法は日本ユダヤ学会ヘブライ語カナ表記委員会による統一見解に従った⁽¹¹⁾。

2. 穢れと手洗いの要領

ミシュナにおいて穢れは五段階に分類される(清潔の巻、トホロト篇1-5他)。もつとも強い穢れは「穢れの父たちの父」と呼ばれる「人間の死体」であり、「天幕形成によって人間と物」を穢す。その次は「穢れの父」と呼ばれる「人間、もの、死んだ這うもの」で、「穢れの父たちの父」との「接触によって人間と物」を穢す。その次は「第一級の穢れまたは穢れの子」と呼ばれ「穢れの父」によって穢された「人間、もの(液体)」である。食料と液体を穢すが人間は穢さない。その次は「第二級の穢れ」と呼ばれ「第一級の穢れまたは穢れの子」によって穢された「食料」である。「献納物と聖別食料」を穢すが人間ともは穢さない。最も軽度の穢れは「第三級の穢れ、または不適格」と呼ばれ「第二級の穢れ」によって穢された「献納物と聖別食料」である。なお、液体はいかなる等級の穢れと接触しても、

第一級の穢れの保持者となる⁽¹²⁾。

こうした穢れは手を通じて体内へ取り込まれるため、手洗いはとても重要である。このため、清潔の巻、ヤダイム(「手」の複数)篇の多くは手洗いに費やされている。手洗いの際には容器を使わなければならない。その素材は「どんな器からでも、水を両手に注いでもよい。たとえ糞製器、石製器、(焼いていない)土器からでも水を両手に注いではならない場合とは、(壊れた)器の側面からはいけないが、(壊れた)杓子の底からも駄目であり、また、壺の栓からもいけない。……」(清潔の巻 ヤダイム篇1-2)(表1-例文①)とある。「(焼いていない)土器」(クレイ・アダマ)(表1-1)は直訳すると土の器だが、一般的には未焼成の土器と解釈されている。ミシュナの他の箇所(例えば、清潔の巻 ケリム篇10-1)に見られるように、クレイ・アダマはしばしばクレイ・ヘレス(表1-2)と並べて用いられており、クレイ・ヘレスは焼いた土器と訳される。ヤダイム篇1-2ではクレイ・アダマのみが記されているが、これは焼いた土器はもとより水漏れしやすい未焼成の器でも手水器として使用されたことを強調するものだろう。ミシュナは手洗いの要領についても詳細に記している。

表1 ミシュナ原文に用いられた用語と読み方一覧

	原文	読み方	一般的な和訳	例文
1	כלי אדמה	クレイ・アダマ	焼いていない土器	①「どんな器(כלים)からでも、水を両手に注いでもよい。たとえ糞製器(כלי גללים)や、石製器(כלי אבנים)や、(焼いていない)土器(חרטום)からでも。水を両手に注いではならない場合は、・・・また、壺の栓(תופת חבית)からもしけない。・・・また、自分の同僚(の両手に水を、自分の両手のひらを)覆ませて注いではならない。なぜなら、水を引き、(水を赤毛の雌牛の灰に混ぜて)聖化して、贖罪の水を注ぎ、或いは(手洗い用の水)を両手に流すのは、ひとえに器によってのみだからである。」(清潔の巻 ヤダイム篇1-2) (三好 312)
2	כלי חרש	クレイ・ヘレス	焼いた土器	
3	כלי גללים	クレイ・グラリム	糞製器	
4	כלי אבנים	クレイ・アバニム	石製器	②「糞製の器(כלי גללים)や、石製器(כלי אבנים)や、(焼いた)土器、そして明礬製容器、魚骨製の、そしてその皮の、海にいた動物の骨の、及びその皮からの容器、また、木製の(常に)清い器・・・」(清潔の巻 ケリム篇 10-1) (三好 27)
5	חבית	ハヴィート	壺等	③「壺の栓(תופת חבית)は、(壺と)連結されていると見なされない。」(清潔の巻 ケリム篇3-6) (三好 9)
6	מגופה	ムグファ	蓋、栓、等	* Kline 及び Mechon Mamreではクレイ・ヘレスはסורן(最後の文字が異なる)と表記されている。なお、和訳と異なる、原文ではいずれもクレイ・アダマ(焼いていない土器)が併記されている。
7	כיוור	キヨール	洗盤	④「ベン・カティーンは洗盤(כיוור)に12の栓(דב)を設けた。かつては2つだけであった。」(祭日の巻 ヨーマ篇 3-10(長塚・石川 252) * Mechon Mamre では3-11。
8	דד	ダドゥ	栓	
9	ספל	スフェル	鉢	⑤「そこには2個の銀の鉢があった。・・・2本の細い鼻腔のような穴があいていて、同時に空になるように、1本は太く、1本は細い。」(祭日の巻 スッカー篇 4-9) (長塚・石川 294) * Mechon Mamre では4-8。
10	לוג	ログ	容量の単位	⑥「(手洗いには)最小量として1ログの)4分の1の水を、1人、或いは2人用に両手に流す。半ログ(אף)なら、3人、或いは4人のため、1ログ以上なら、5人、10人の及び100人のため(用いられる)。ラビ・ヨセは言う、「ただし、彼らの中の最後の者には、4分の1(ログの水)よりも減ってはならないとの毒玉権において」と、2回目(の水)に加えてもよいが、最初(の水)に、さらに(水)を加えてはならない。」(清潔の巻 ヤダイム篇1-1) (三好 312)。
11	ביצה	ベイツァ	鶏卵	⑦「小玉の鶏卵(ביצה)をそれで茹でるのに十分・・・」(季節の巻 シャパット篇 8-5) (長塚・石川 46)
12	איטלקי	イタルキ	イタリア	⑧「湿りと乾燥したものの度量は、イタリア(איטלקי)における基準によった。」(清潔の巻 ケリム篇 17-11) (三好 45)
13	תרנגול	タルノグル	ニワトリ	⑨「・・・(練り粉に)鶏(תרנגול)が突いた孔があり、その家の中に穢れた液体がある場合、・・・」(清潔の巻 トホロート篇 3-8) (三好 210) * この例文では複数(タルノグリム)であるが、カウフマン・コデックス以外の原文は双数(タルノグリン)となっている。なお、現在知られる用語としてはタルノグルよりもタルヌグル(תרנגול)がより一般的である。
14	מזרק	ミズラク	鉢	⑩「彼はこれを屠り、その血を鉢(מזרק)に受け、前に入った場所に入り、前に立っていた場所に立つ。」(祭日の巻 ヨーマ篇 5-4)。(長塚・石川 258) * Mechon Mamreではミズラクが鉢という名詞となっており和訳もこれに順じているが、カウフマンコデックスA50では「撒き散らす」という表現になっている(סוח את המזרק דמו)。

口縁部が内湾する小鉢に関する一考察

「両手は手首までが穢れたり、清くなったりする。どのようにか。最初の(水)を手首まで注ぎ、そして二回目(の水)を手首を越えて(注ぎ、その二回目の水が)手に流れ戻ると、(それでも手は)清くなる。最初(の水)と二回目(の水)とを手首を越えて注ぎ、そして、(その水が)手に流れ戻っても、(手は)穢れたままである。最初(の水)を一本の手に注ぎ、思い直して、二回目(の水)を彼の二本の手に注ぐと、(二本の手は)穢れたままである。最初(の水)を彼の二本の手に注ぎ、そして思い直して、二回目(の水)を彼の一本の手に注ぐと、その手は清くなる。彼の一本の手に(水を注ぎ)、そして、その手を相の手でこすると、それは穢れたままになる。(彼の手をこするの

が)自分の頭にか、或いは壁になら、(その手は)清い。四人ないし五人(の手)に、それぞれの手を並べてか、或いは、それぞれの手を上に(重ね)合わせて水を注ぐのもよい。ただし、条件は(それらの手の合わせ方が)ゆるやかで、水がそれらの間を通りうる限りである。」(清潔の巻 ヤダイム篇213)⁽¹³⁾。要点を整理すると、手洗いは両手首から先を片方ずつそれぞれ二度洗うことが必要である。その際、一回目の手洗いで穢れた水を二回目の水で流し去らねばならない。つまり、一度目の水と二度目の水を混在させてはならないということで、同じ容器の水に二度手を入れて洗うのではなく、容器の水を手二度ずつかけて洗うことが基本的な要領ということになる。

手洗いの水は手と手の間を通りさえすればよく、少量の水でも充分である。その量は一、二人の両手分として四分の一ログ、三、四人用として半ログ、五人、一〇人及び一〇〇人用として一ログ以上とされる(清潔の巻 ヤダイム篇111)(表11例文⑥)。一ログの水があれば重ね合わせた一〇〇組の手にも十分な量とされる。ただし、最後の人の手を洗うために必ず四分の一ログの水を残しておくかねばならない。ログ(表110)は固体・液

体双方の容量を示す単位で、卵(ベイツア、表111)、六個分、即ちおよそ三分の一リットルとされる。⁽¹⁴⁾「小玉の鶏卵をそれで茹でるのに十分な……」(季節の巻 シヤバット篇815)(表11例文⑦)という例文が示すように、ミシユナにおけるベイツアは一般的に鶏卵と訳される。⁽¹⁵⁾

ミシユナには「……(練り粉に)鶏が突いた孔があり、その家の中に穢れた液体がある場合、……」(清潔の巻 トホロート篇318)(表11例文⑧)のように、鶏(タルヌゴル)⁽¹⁶⁾(表1113)が身近な家禽であったことを示す記述がある。以前のパレスティナでは駝鳥、特にその卵殻の利用が一般的であったが、⁽¹⁷⁾鉄器時代Ⅱ期頃のテル・ヘシユバン、イエルサレム、ラキシユからは家畜化された鶏の骨(*Gallus gallus domesticus*)等が出土しており、この頃から鶏が利用されるようになった。ただし、ギベオンで出土した土器片に刻んだ雄鶏と雌鶏のモチーフが示すように、当初は食用というよりも闘鶏目的の飼育だったようだ。⁽¹⁸⁾ヘレニズム〜ローマ時代になるとナバテア地域やイエルサレムのオフェル地区から卵殻も含めて大量の鶏の骨が出土しており、⁽²⁰⁾食用としても用いられるようになったと考えられる。こうしたことから、鶏は

ミシユナ成立時の庶民にとつて身近な家禽であり、ペイツアは鶏卵と考えて差支えないだろう。鶏卵なら一個あたり約五〇ccであり、一ログ（五人、一〇人及び一〇〇人用）は約三〇〇cc、四分の一ログは約七〇〜八〇cc（一〜二人分）、半ログは約一五〇cc（三〜四人分）となる。この値は上位の単位であるバトから換算した先行研究の結果とも一致する。⁽²¹⁾

一方、ログは単位であると同時に何らかの器を意味したという説もある。⁽²²⁾それは聖書の「祭司はまた、「一」ログの油を取り、「それを」祭司「自身」の左の手のひらに注ぎかける。そして祭司は、彼の左の手のひらにある油に彼の右手の指を浸し、その油の一部を彼のその指で七度にわたってヤハウエの前に向けて振りかける。祭司はまた、彼の手のひらに残っている油の一部を……」（レビ記 14⁽¹⁵⁾〜18⁽²³⁾）を根拠としている。冒頭の「一」ログの油を」の原文（ミログ ハシエメン⁽²⁴⁾）は「一ログの油を」以外に「油のログから」つまり「油を入れたログという容器から」とも読み取れる。つまり、何らかの容器に入った一ログ分の油を、もしくはログという容器に入った油を掌に移したという解釈もできる。この一文はミシユナ以前に水ではなく油で清めを行う習

慣があったこと、掌を器のように窪ませて液体を入れたこと、一ログが掌に収まる容量であったこと、もしくはログが容量の器そのものであった可能性を示す。片手の容量とは約六〇ccで、先に算出した四分の一ログ、すなわち一〜二人分の手水に相当する。なお、ミシユナには「自分の同僚（の両手に水を、自分の両手のひらを）窪ませて注いではならない」（清潔の巻 ヤタイム篇1-2）（表1-例文①）と手を窪ませて手水を汲むことを禁じているが、このことは右に挙げた聖書時代の習慣を踏まえたものといえよう。

ミシユナは液体（及び個体）の度量衡について「そして（彼らはたびたび）小さい度量で規定した。湿りと乾燥したものの度量は、イタリアにおける基準によった。これは、荒野において（モーセが用いた基準でも）ある。」（清潔の巻 ケリーム篇17-11）（表1-例文⑧）と、イタリアの基準によるものとしている。「イタリア」（表1-12）は、紀元前一世紀末にはアルプスまでの半島全体を指し示す用語であった。古代ローマ世界においては液体容量を示す単位としてキアトウスやコテユラが用いられたが、鶏卵に基づく一ペイツアは「イタリア」の基準である一キアトウス（約四五ミリリットル）に、また

一ログは一コテュラ（六キアトウス、約二七〇ミリリットル）に相当する。また、紀元二―三世紀の人といわれるアテナイオスが記した『食卓の賢人たち』には、ラテン語で小鉢を意味するコテュラ（もしくはコテュレ）が窪みのある器の一般名称であり、『手のコテュレ』などとも言った。それゆえ『コテュレいっぱいの皿』とは両手をお碗のようにくんですくい取れる皿ということだ。」とも記している。⁽²⁵⁾ 容量の単位やその器、さらには手洗いそのものがローマ世界から持ち込まれた習慣であった可能性も今後検討しなければならないだろう。

3. 手水器の形



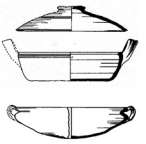
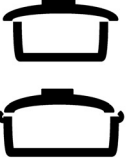
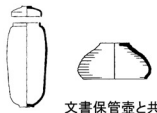
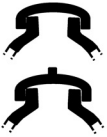
前項で述べた手洗いの要領に加え、「自分の膝の間に壺をおいて、（両手に水を）注いでもよい。壺をその側面に寝かせて（手に水を）注いでもよく、または猿が（人の）両手に水を注いでもよい。」（清潔の巻 ヤダイム篇1-5b）⁽²⁶⁾ という規定は、手洗いが片手ずつを基本としながらも両手に流す場合には容器を膝などの身体他の部分や人以外の生き物が支えながら傾けて水をかけても良いことを示している。つまり手水器は設置型ではなく携帯型といえよう。また先に紹介した聖書の記述も

考慮するならば、その形は四分の一ログ程度の容量で掌に似たものと想定できる。

さらにヒントとなるのは、「壺の栓からもいけない。」（清潔の巻 ヤダイム篇1-2）（表1-例文①）という一文である。この意味を理解するためには、例えば「……しかし、壊れるなら、清い。それらから再び器を作るなら、その時点からそれ以後、穢れを受けうるものとなる。……」（清潔の巻 ケリーム篇2-1）⁽²⁷⁾ が示すように、ミシュナにおいて壊れた断片を器として再利用することや修復して使うことは穢れであることを前提とする必要がある。「壺の栓からもいけない。」とは逆説的に壺（ハヴィート）（表1-5）の栓（ムグファ）（表1-6）が手水器に似た形であったことを意味する。

ヘレニズム―ローマ時代のパレスティナではいくつかの異なる型式の蓋が考古資料として知られている。第一に、容器の口に詰めて用いるいわゆる栓で、未焼成の粘土を大まかに丸めたボール状のものと楔状、もしくはデイスク状に成形して焼成したものがある（表2-1）。第二に、キャセロールやフライパンといった浅鍋の蓋で、実際にマサダ遺跡等からは浅鍋と共伴した事例が知られている（表2-2）。鍋の蓋は底部端部が外へやや水平に

表2 蓋や栓の出土例とミシュナから想定される名前

	出土例	使用イメージ	ミシュナでの記述例
1	 <p>壺や香油瓶の口を密封</p>		<p>①「以下の器は、しっかり締まった覆い蓋(קַרְסוּף פַּתִּילִים) (ツァミード・パティール)によって防御するものである。」「何によって、それらを(しっかりと)締め回すのか。石灰で、ギプスで、泥で、ワックスで、粘土で、人糞で、モルタルで、土器粉で、そして粘着用になるすべてのもので…」(清潔の巻 ケリム篇10-1~2) (三好 27)</p>
2	 <p>鍋と共伴 例: マサダ(上)</p> <p>0 5cm</p>		<p>②「ぶどう酒壺や油壺の覆い(קַרְסוּף) (カスーイ)と、バビルス壺の覆い(同上)は穢れを受けえない。しかし、もしそれらを(容れ物としての)用途に応用するならば、それらは穢れを受けうるものとなる。シチュウ鍋の覆い(同上)は、それに孔があいていて、(先が)尖っていない限り、穢れを受けえない。もしそれに孔があいていないで、(先が)尖っていないならば、穢れを受けうる。なぜならば、彼女は、その中に野菜(の水分)を漙すことができるからである。」「(清潔の巻 ケリム篇2-5) (三好 6)</p> <p>③「手箱の覆い(同上)は穢れうる。たんすの覆い(同上)は清い。…」(清潔の巻 ケリム篇16-7) (三好 42)</p> <p>④「すべての覆い(同上)は、湯沸かし器のもの以外は、清い。」「(清潔の巻 ケリム篇14-3) (三好 37)</p>
3	 <p>文書保管壺と共伴 例: クムラン(左)</p> <p>0 10cm</p>		<p>⑤「…水を両手に注いでではないならぬ場合とは、…壺の栓(קַרְסוּף מִגְרָפָא) (ムグファ)からいけけない。」「(清潔の巻 ヤダイム篇1-2) (三好 312)</p> <p>⑥「(中ほどの硬さの)練り粉が…それら(壺の鍋底に見つかった針か或いは輪)を壺の栓(同上)の中に見出される場合…」(清潔の巻 ケリム篇9-1) (三好 23)</p> <p>⑦「壺の栓(同上)は、(壺とは)連結されていると見なされない。」「(清潔の巻 ケリム篇3-6) (三好 9)</p>

口縁部が内湾する小鉢に関する一考察

広がりながら容器の口を内もしくは外から覆う。受部からの立ち上がりは内傾し、器壁の断面は丸みを帯びた平たい三角形状である。頂部の小さな把手には直径約一センチメートルの孔が穿たれている⁽²⁸⁾。同様の事例はイエールサレムやゼロールでも知られている。第三に、クムラン遺跡で知られる文書保管壺の蓋で、底部の端部が内湾もしくはは下降し、壺の口を外側から覆うように封じるものである(表2-13)。蓋を逆さまにするとその形はまるで容器のようで、頂部につまみ状の把手が付くものは器として安定しないことが明らかだが、そうした把手が無かつ壺と共伴せずに出土した場合には容器と見分けることが困難である。実際、イエールサレムとマサダでは同じタイプで頂部に孔が穿たれている事例が小鉢や漏斗として報告されている⁽²⁹⁾。

一方、ミシュナには蓋がツァミード・パティール、カスーイ、ムグファと少なくとも三つの用語で表されており、それぞれ機能が異なるようである⁽³⁰⁾。ツァミード・パティールは粘土や石灰等を固めたもので、たびたび「締め回す」(ツァミード・パティール)という表現が使われていることから(表2-1例文①)、考古資料の栓と考えられる。楔状やディスク状のものもここに含まれるかもしれない。

カスーイは葡萄酒甕、油甕、パピルス壺、シチュウ鍋といった容器の他、手箱やたんす、食事とその他多様なものに用いられている。このうちシチュウ鍋についての既述(表2-1例文②)は「先が尖っており、孔があいている」という点がマサダ遺跡などから出土した鍋蓋と一致する。ムグファは多くの場合ハヴィートとセットで用いられており、また「壺の栓は、(壺とは)連結されていると見なされない。」(表2-1例文⑦)からは、ハヴィートとムグファが連結すると一体に見えることを示唆している。考古資料としてはクムラン出土の壺の蓋と一致する(表2-3、出土例の図 左側⁽³¹⁾)。この蓋は掌ほどの大きさで、逆さまにすると小鉢に大変良く似ている。この解釈が正しければ「壺の栓からもいけない。」という既述の一文は、クムラン出土の壺の蓋を意味し、小鉢が手水器であったことの傍証になるであろう。一方で、既述のように「パピルス壺の蓋」がカスーイと表現されている箇所もあるため、ムグファ及びカスーイと考古資料の関連性については今後精査が必要であろう。

4. まとめと今後の課題

ミシユナの記述に探った結果、手水器の大きさと容量、

形状のいずれもが口縁部が内湾する小鉢と矛盾しないことがわかった。冒頭で示したテル・アトリブ出土の土偶は現時点における物証であるが、今後同様の資料を模索していく。

手水器を考古資料に見出そうとする別の試みとしてマサダ遺跡から出土した土器に関するものがある。それは胴部が丸く膨らみ開口部が大きく朝顔のように開いた壺形容器で、完形が一点、破片が三点出土している⁽³²⁾。胴部の最大径は二五センチメートル、開口部の直径は三〇センチメートルで、実測図によると底部は欠損しているようだが高さは二六センチメートルまで残る。アテネなどの他地域からの類例より、底部にはもともとリング状の高台が付いていたと考えられている。開口部分の外面には直線及び波状の文様が刻まれ、内側には小さな穴が五つ穿たれている。高さ六六センチメートルの筒状の器台が相伴しており、これに設置して用いたものと考えられている。エジプトの民族例にもとづいて手水器と解釈されているが、一方で開口部が大きく外反する形状は葡萄酒と水を混ぜてアルコール分を揮発させるのに適当であることからクラテル(混酒器)という説もある⁽³³⁾。ギリシアでは前四世紀のアテネやコリントス⁽³⁴⁾、イスラエルでは

前二世紀のマレシヤ⁽³⁵⁾で類似例が知られている。これまで検討してきたいくつかの点を踏まえるならば、マサダの事例は大きさ、形、そして共伴する器台と、いずれも固定式の器であることを示しており、本稿で論じてきた手水器とは別物と言える。

発掘報告者であるバルナタンはこの複数の孔が開いた容器をミシユナにおけるキヨール（洗盤）（表1-7）と説明している。⁽³⁶⁾確かに「ベン・カティーンは洗盤に二つの栓（二人が一度に手を洗うための孔…和訳の註より）を設けた。かつては二つだけであった。」（祭日の巻 ヨーマ篇3-10）（表1-4）の「栓」（ダドゥ）（表1-8）はマサダの事例に見られる五つの孔と共通しているようだ。この他、「そこには二個の銀の鉢があった。ラビ・ユダは言う、それらは陶器だが、ぶどう酒のためそれらの表面がくすんだのである。またそれらには二本の細い鼻腔のような穴があいていて、同時に空になるように、一本は太く、一本は細い。西（側）は水のため、東（側）のはぶどう酒用である。水のをぶどう酒の（鉢の）中に、またぶどう酒の水の中に注いだとしても、彼は（義務を）果たしている。ラビ・ユダは言う。彼は一口グの水を八日間ずっと注ぐ。……」（祭日の巻 ス

ッカー篇4-9）（表1-5）⁽³⁵⁾が示すとおり、水汲みの祭り用の鉢（スフェル）（表1-9）にもまた複数の孔が穿たれているうえ、「一口グの水を八日間ずっと注ぐ」という文言は設置型の洗盤を想起させるものである。このことから、マサダの容器は本稿で論じてきた手水器とは異なり、むしろ洗盤、即ちキヨールもしくはスフェルに近いと考えられる。

ところで水汲みの祭りや洗盤については、三世紀前半にユダヤ教の拠点であるサンヘドリンとして成立しミシユナの編纂にも深く関わりがあるイスラエル北部、セフォリス（もしくはチツポリ）遺跡から興味深い資料が出土している。⁽³⁷⁾それは口径一七センチメートル、高さ〇・五センチメートルのクラテル（セフォリス・ボール）で、これによく似た器で沐浴する誕生直後のディオニソス神を描いたモザイク画も出土している。⁽³⁸⁾また、同遺跡ではナイル川を擬人化したモザイク画も出土しており、⁽³⁹⁾流れる水もしくは川と髭を生やした男性像、そして両脇にニンフの姿が描かれている様子はイタリア南部、ポンペイ遺跡の壁画に似ている。⁽⁴⁰⁾セフォリスの事例は破損が激しく明確でないが、ポンペイの事例ではニンフ達がセフォリス・ボールに良く似た水盤を抱えており、その水盤か

らは水が流れ出ている。水に関係した祭りとの関連から水盤や小鉢を考えることも今後検討すべきであろう。

最後に残された課題としては手水器の名称についてである。既述のようにログが容器の名称であった可能性以外にも「彼はこれを屠り、その血を鉢に受け、前に入った場所に入り、前に立っていた場所に立つ。その(血の)中から彼は一回上方に、七回下方に振りまく。……彼は雄山羊の血の中に雄牛の血を空け、(鉢に)一杯入っているものを空(の鉢)に注ぎ入れる。」(祭日の巻 ヨーマ篇5-4)の鉢(ミズラク、表1-14)がある。元々の意味は「撒き散らすもの」で、水盤とも訳される。しかし、この文面からは設置して用いた様子は想像できない。手水器の名前については今後さらに検討を続ける。ミシユナは考古資料を彼ら自身^が器をどのように認識していたかを知る重要な史料と言える。また、研究者の側からでなく使い手からの観点から考古資料を再検討することは、離散ユダヤ民族の生き残り戦略を考えるうえで重要といえる。今回の研究で明らかとなったいくつかの課題については引き続き検討を重ねていく。

*本研究は文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究

(A) 研究課題名「ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究」(研究代表者：市川裕 課題番号25257008)の助成を得て行ったものである。ヘブライ語のカナ表記については東京大学人文社会系研究科教授、市川裕先生、東京大学大学院博士課程、志田雅宏さんから貴重な助言を得た。I also would like to appreciate very much to Professor Karol Mysliwiec at University of Warsaw, the Director of the Research Centre for Mediterranean Archaeology of the Polish Academy of Sciences, for some important suggestions and for permission to use a photo from his article.

註

- (1) Gunnweg, J., et al. 1983 *The Provenience, Typology, and Chronology of Eastern Terra Sigillata*. Qadem 17. Jerusalem.
- (2) このことがいち早く指摘されたのはアナトリア南東部タルススからの出土例に関するもので、前期の小鉢に比べて中期・後期のものは浅く小さく口縁部の内湾する角度もシャープになる (Jones, F. F. 1950 "The Pottery," in H. Goldman (ed.) *Excavations at Gzulu Kule, Tarsus, I: The Hellenistic and Roman Periods*, Princeton, pp. 149-

- 296)。ヘレスティナではテル・ミンルなどでも報告される。(Fisher, M. 1989 “Hellenistic Pottery (Strata V-III)”, in Z. Herzog et al. (eds), *Excavations at Tel Michal*, Tel Aviv, pp. 177-187)。
- (3) Berlin, A. M. 1987 “The Plain Wares”, ix-246 in S. C. Herbert. (ed.). *Tel Anafa II, i*, Kelsey Museum of the University of Michigan, p. 7.
- (4) Guz-Zilberstein, B. 1995 “The Typology of the Hellenistic Coarse Ware and Selected Loci of the Hellenistic and Roman Periods,” in A. Belfer-Cohen et al (eds.) *The Excavations at Dor, Final Report Volume IB. Areas A and C: The Finds*. Qedem Reports, The Institute of Archaeology, The Hebrew University of Jerusalem in cooperation with The Israel exploration Society, p. 289.
- (5) Mysiwiiec, K. 1998 “La fonction des bains publics de l’Époque proténaïque à Athribis,” in : Kwartalnik Historii Kultury Materialnej vol. 46 /1-2, p. 132. Fig. 9. 報告者による別稿には浴槽遺構から出土した土偶として写真番号の無い図が一点付られており、口縁部が内湾する小鉢の水を汲み上げ身体にかけて使うと説明されている(Mysiwiiec, K. 2007 “Tell Atrih” *Kisazka Tell Atrih: Layout 1*, p. 140, 1. 8-9, Online Publication, http://www.jpcoma.uw.edu.pl/fileadmin/template/main/ing/lat70/book70_12.pdf#search=kisazka+Tell+Attrib%27 (access : 2015. 10. 12))。このため、筆者は平成二十七年(2015)度日本オリエント学会総大会ポスター発表においてこれをその土偶と紹介した。しかし口縁部が内湾する小鉢に関する一考察
- かし、その後ミシリヴィエッチ教授に確認したところ、実際には一九九八年論文に掲載された写真が当該資料で(6)の(7)を示していた。
- (6) Mysiwiiec, K. & Poludnhikiewicz, A. 2003 “A center of ceramic production in Ptolemaic Athribis,” in : C. A. Redmount, & C. A. Keller (eds.), *Egyptian Pottery. Proceedings of the 1990, Pottery Symposium at the University of California, Archaeological Research Facility*, University of California, Berkeley, p. 137, Fig. 9-1, p. 138, Pl. 9-4.
- (7) 石川耕一郎(訳)一九八七年『ミシエチナ・セサコム』エルサレム文庫 長澤豊三・石川耕一郎(訳)二〇〇五年『ミシエチナ II キエチム』教文館『三好迪(翻訳・監修)一九九七年『タルムード』トポロートの巻』三貴。
- (8) The Hebrew University in Jerusalem, *Ozer katvei talmudim* (Online Treasury of Talmudic Manuscripts in Hebrew with English introduction and acknowledgements), <http://nml.huji.ac.il/dl/talmud/>, (access : 2015. 7. 1-10.)
- (9) Kline, M. 2005 *Shisha Sibre Mishnah* (in Hebrew), <http://chaver.com/hebrew%20index.html>, (access : 2013. 10. 10-)
- (10) Mechon Manne 2002 *Shisha Sibre Mishnah* (in Hebrew), <http://www.mechon-manne.org/b/h/h0.htm>, (access : 2013. 10. 10-)
- (11) 日本ユダヤ学会「ヘブライ語カナ表記委員会 二〇〇八年一月へブライ語カナ表記方法とその用例答申」

<http://www.waseda.jp/assoc-isis/hyouki.html> (アクセス年二〇一五年一月一七日)。

- (12) 三好 前掲 一〇三頁 註13の表を参照。なお、手の穢れの度合いについてはラビによって異なる考え方があり、皮膚病を患っている家屋に自分の手を突っ込む人は第一級の穢れにあるという主張もあれば(ラビ・アキバによる)、これを第二級とする賢者たちもいる。液体(葡萄酒、蜂蜜、乳、露、血、水(清潔の巻、マフシリーン篇6・4))によって穢れた食物と器は手を第二級の穢れにするという説(ラビ・ヨシユアによる)もあれば、穢れの子(即ち液体)によるものは手を穢まないとする説(他の賢者たちによる)などがある(清潔の巻、ヤダイム篇3・1)。
- (13) 三好 前掲 三一四―三一五頁。
- (14) 三好 前掲 三二二頁 註1。
- (15) 他の事例としては「日中に焼きあがるのに十分(な時間)がなければ、肉、玉葱、鶏卵を焼いてはならない。」(季節の巻 シャバット篇1・10) (長窪・石川前掲 二四頁)、「鶏卵の殻に穴をあけてそれに油を満たし垂れ落ちるように、灯火の口の上に置いてはならない。」(季節の巻 シャバット篇2・4) (長窪・石川前掲 一六六頁)、「良き日(祭日)に産み落とされた卵につけて……」(季節の巻 ベイツァ篇1・1冒頭) (長窪・石川前掲 三〇三頁)、「小玉の鶏卵を料理するのに十分な……」(季節の巻 シャバット篇9・5) (長窪・石川前掲 四八頁)があるが、これらのうち鶏卵、もしくは卵と訳されている

原語は全てベイツァである。

- (16) 他に「鶏が這うものを呑み込んで、窯の空間内に倒れた場合、(その窯は)清いままである。」(清潔の巻 ケリム篇8・5) (三好 前掲 二二頁)。「鶏の(餌の)ために糞を(水につけてはならない。……)」(季節の巻 ペサヒム篇2・7) (長窪・石川 前掲 一六八頁)がある。
- (17) ミシユナや聖書には穢れた鳥としての駝鳥やその卵について記されているが(例えば、清潔の巻 ケリム篇17・14、聖書 ヨブ記30・29、39・13・14、エレミヤ書50・39、ミカ書1・8など)、卵殻は象牙にも似た美しさと丈夫さから器や装飾品に加工されたり、また駝鳥の卵殻を模倣した容器なども好んで用いられた (Taufel, B. 1926 *Ostrich egg-shell cups of Mesopotamia and the ostrich in ancient and modern times*. Field Museum of Natural History, Department of Anthropology, Chicago; Amiran, R. 1969 *Ancient pottery of the Holy land*. (International Edition) Massada Press Ltd, pp. 118-119)。
- (18) テル・ヘシユバンからは鉄器時代Ⅱ期もしくはヘルシア時代(前七、六世紀以後)のものが大量に (Boessneck, J. M., & von den Driesch, A. 1978 "Preliminary analysis of the animal bones from Tell Hesban," *Andrews University Seminary Studies* 16, pp. 266-267)、「イェルサレムのオフエルからは鉄器時代(前八―七世紀)のビルディンダDから一二点 (Horwitz, K. L. & Tchervov, E. 1989 "Subsistence pattern in ancient Jerusalem: A study of ani-

mal remains," in: E. Mazar & B. Mazar (eds.) *Excavations in the South of the Temple Mount. The Ophel of Biblical Jerusalem*. Qedem, Monographs of the Institute of Archaeology 29, pp. 144-154)。¹⁶⁾ ユダヤ王国は鉄器時代Ⅱ期の始めものが三点が見つかつた。(Ussishkin, D. 1978 "Excavations at Tel Lachish 1973-1977, Preliminary Report," *Tel Aviv vol. 5*, pp. 88-89)。¹⁷⁾ また、テル・エン・ナスレは雄鶏のモチーフを描いた印章(鉄器時代Ⅱ期)も見つかつた(McCown, C. C. 1947 *Tell en-Nasbeh I: Archaeological and Historical Results*. Pacific Institute of Pacific School of Religion and American Schools of Oriental Research, Berkeley and New Haven, Pl. 57, pp. 4-5)。

(19) Taran, M. 1975 "Early Records of the Domestic Fowl in Ancient Judea," *The International Journal of Avian Science*. Vol. 117, pp. 109-110.

(20) ナシテマ地域には多数の鶏の骨が出土しており、エシ・ザントゥルでは鳥類の骨四十七点の大半が鶏である。成鳥の骨だけでなく卵殻も見つかつている。家畜化されたガチョウ (*Anser anser*) の出土数がわずかに増える(アム・ヒ比較)の注目を浴びる(Studer, J. 2007 "Animal Exploitation in the Nabataean World," in K. D. Politis (ed.) *The World of the Nabataeans*, Volume 2, *Oriens et Occidentis* 15, p. 262)。¹⁸⁾ また、イェルサレムのオフェルからは前期ローマ時代(前一世紀-後一世紀)の鶏 (*Gallus domesticus*) が五点出土した。(Horwitz et al. *ibid.*, pp. 144-154)。

口縁部が内湾する小鉢に関する一考察

(21) 「ハット」は「バレン」、¹⁹⁾「ヘン」は「ニ」ログである。ハットの容量として「ハ」の文字を刻んだラ・メレク壺に基づく研究がいくつかある。ラメレク壺は「ラ・メレク(王のため)」という文字を肩部に刻んだ壺型土器でパレスティナでは前八世紀頃から出土する。オルブライトはテル・エン・ミルシムやラキシュから出土したラメレク壺の容量を比較し(Inge, C. H. 1938 "Excavations at Tell ed-Duweir," *Palestine Exploration Quarterly* 70(4), *Palestine Exploration Fund*, p. 248, Fig. 2)「ハット」は「ニ」リットルと解釈した(Albright, W. F. 1943 "The Excavations at Tell Beit Mirsim III. The Iron Age," *AASOR* 21-22, New Haven, American Schools of Oriental Research, p. 58, note. 7, Pl. 60:2)。²⁰⁾ ナシントキンは再発掘したラキシュから出土したラメレク壺の一点に「ハット」という刻印と数字の「一」のサイン「ス」が刻まれたという(アム・ヒ)の容器の容量が「ハット」と考へた(Ussishkin, D. 1978 "Excavations at Tel Lachish 1973-1977, Preliminary Report," *Tel Aviv vol. 5*, 1, pp. 86-87, Inscription XXX, Fig. 29, Pl. 31)。²¹⁾ なお、同様の刻印は「アム・ヒ」で知られている(Aharoni, Y. 1981 *Avard Inscriptions*, Jerusalem)。²²⁾ 最近では「アム・ヒ」のラメレク壺の容量を三次元解析によってより正確に算出し、「ハット」が約「二・四リットル」、即ち先の結果がほぼ正しいことを証明した(Zapassky, E., et al. 2009 "Computing abilities in antiquity: The royal judahite storage jars as a case-study," *Journal of Archaeological Method Theory* 16, pp. 51-67)。

口縁部が内湾する小鉢に関する一考察

一一五 (三一一)

- (22) Lipschits, O., et al. 2012 The Enigma of the Biblical Bath and the System of Liquid Volume "Measurement during the First Temple Period." *Ugarit-Forschungen* 42, p. 454; Kletter, R. 2014 "Vessels and Measures: The Biblical Liquid Capacity System," *Israel Exploration Journal* 64-1, Israel exploration Society, 22-37. なお、これらの論文においては、ストロイコフ容量と同時に「ラメリン壺」のものの名称であるとしている。
- (23) 旧約聖書翻訳委員会他 二〇〇〇年 二九六―二九七頁。
- (24) The Jewish Publication Society 1999 *JPS Hebrew-English Tanakh*, second edition, Philadelphia, p. 238.
- (25) マテナ・オス著 (柳沼重剛訳) 第11巻 一一八頁。この他に、兵士が携帯する水飲み用の器や (前掲 第10巻、七一頁 註1) 酒杯としてもコテュラが用いられている (前掲 第11巻、一一八頁)。また、手や足をすすいで汚れた水を「ポニンマ」手にかける水や鉢を「ケイロニプトロン」と呼ぶことや (前掲 第9巻、四六五頁)、犠牲を捧げた祭壇から下ろした燃えた薪を浸した手水は「ケルニバ」と呼ばれ、参会者に御祝いとして与りかけること (前掲 第9巻、四六二頁)、ケルニボンという手すすぎの水の器が水差しとセットで使われる様子も示されている (前掲 第9巻、四六〇頁)。これらは手水や手水器の使用はミシユナ時代のユダヤ民族と共通する習慣と捉えられる。
- (26) 三好 前掲 三二三頁。
- (27) 三好 前掲 五頁。
- (28) Bar-Nathan, R. 2006 *Masada VII. The Yigal Yadin Excavations 1963-1965 Final Reports. The Pottery of Masada*. Jerusalem, p. 187, Pl. 32, 18-21.
- (29) Bar-Nathan *ibid.*, pp. 149-150, Plate., Geva, H (ed.) 2003 *Jewish quarter excavations in the old city of Jerusalem. Vol. II. The finds from Areas A, W and X-2*. Jerusalem, p. 233, Plate. 6: 1-15, p. 235, Plate. 6: 2-39-40.
- (30) マーソン、エマフルトにて開催された第二二回国際宗教学会にて発表した。研究発表マブストラクトとしては Makino, K. 2015 "Jids and the Jewish dietary purification in ancient Palestine." *Abstract Book, XXI World Congress Erfurt, Germany*. International Association for the History of Religions, p. 270.
- (31) University of the Holy Land 2015 *The Distribution of Cylindrical Jars. Date and Provenience*. <http://www.uhl.ac/en/resources/blog/distribution-cylindricaljars/> (access: 2015. 7. 1-10. 10)
- (32) Bar-Nathan *ibid.*, pp. 235-238, Fig. 74.
- (33) Drougou, *ibid.* p. 280.
- (34) Drougou, S. 1979 "Ein Neuer Krater aus Athen. Die Gruppe 'Falaiëf'." *Archaeologischer Anzeiger* 94, 265-282, McPhee, I. 2000 "Falaiëf Bell-Kraters from Ancient Corinth," *Hesperia* 69, The American School of Classical Studies at Athens, 453-486.
- (35) Kloner, A. 2003 *Masada Excavations Final Report I*.

- Subterranean complexes 21, 44, 70.* Israel Antiquities Authority Jerusalem, p. 91, Fig. 66.
- (36) Bar-Nathan *ibid.*, p. 238.
- (37) Nagy, R. M. 1996 *Sepphoris in Galilee: Crosscurrents of Culture.* North Carolina Museum of Art, Winona Lake, Indiana, p. 204, fig. 75.
- (38) Netzer, E., & Weiss, Z. 1994 *Zippori.* Israel Exploration Society. Jerusalem, p. 35.
- (39) Nagy, *ibid.*, p. 128, fig. 61, Netzer & Weis, *ibid.*, p. 48.
- (40) The Multimedia Division at The Louvre: *Work. Fragment of Wall-Painting. Department of Greek, Etruscan, and Roman Antiquities: Roman Art*, <http://www.louvre.fr/en/oeuvre-notices/fragment-wall-painting> (access : 2015. 7. 15-10. 10)